

## コリント人への手紙第一3章1節 「肉的クリスチャン？」

### 1A 肉に属する人

1B 生まれながらの人

2B 御霊を受けている人

3B キリストにある幼子

1C 救いの恵み

2C 実を結ばせていない状態

3C 十字架を背負っていない人

### 2A 乳を飲む状態

1B 固い食物が無理な人

2B 荒野の放浪

3B 士師時代の民

### 3A 妬みと争い

1B 平和なところの争い

2B 分裂

3B 党派心

### 4A 恵みによる成長

1B 愛にある歩み

2B みことばの内での生活

3B 自己吟味

## 本文

コリント人への手紙第一 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びはコリント第一 2 章まで来ました。今週と来週で、3 章をじっくりと見ていきたいと思います。今朝は、3 章 1 節に注目します。「兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語る**ことができず**に、**肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語り**ました。」パウロは、コリントの教会に起こっているいろいろな問題に対処するために、この手紙を書いています。その一つが、私はパウロにつく、私はアポロにつく、というような党派、派閥の問題でした。このようなことが起こる根っこの問題を、パウロがはっきりとここで語っています。「**肉に属する人**」だからだ、というのです。3 節でも、「あなたがたは、**まだ肉の人だからです**。」と言っています。

### 1A 肉に属する人

私たちは前回 2 章で、人は二種類の人に分れることを見てきました。救われていない人と、救われている人といったらよいでしょう。十字架のことばを聞いて、信じて、救われたという神の力を知っている人と、愚かだと思ったり、つまずいたりして信じないで、滅びる人の違いです。パウロは、

全く愚かなものだと見なす人たちは、「生まれながらの人」とし、キリストを知っている人を「御霊を受けた人」としました。

### 1B 生まれながらの人

生まれながらの人は、罪の中に生まれた人です。人はすべて、罪をもって生まれてきます。なぜなら、アダムが罪を犯して、世界に罪と死が入ったからです。本来、人は、自分の霊が神の霊に結ばれて、その中で自分の思いを働かせて、肉の欲求を神の栄光のために用います。ところが、罪を犯して神との関係が切れてしまったので、思いが肉の願うものに支配されています。何を着るか、何を食べるかなど、神を知らないのに、肉の求めるものをそのまま求めるのです。

パウロは、「**生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。**」と言っています(2:14)。神の御霊によって、人は、罪について、義について、さばきについて誤りを明らかにされます(ヨハネ 16:8)。けれども、自分の罪について、生まれながらの人は自覚がありません。義と認められなければいけないということも、分かりません。裁きについては、度外視です。ですから、イエス・キリストを信じなければいけないという必要性が分かりません。キリストの十字架にある、神の愛と言われても、何のことかさっぱりわかりません。こういった人が、生まれながらの人です。

### 2B 御霊を受けている人

けれども、「**御霊を受けている人はすべてのことを判断します**」(3:15)。自分がキリストの復活の命によって、生かされます。キリストの流された血潮によって罪が洗い清められ、御霊によって新たにされます。そこで、神の偉大なご計画と知恵が十字架に隠されていることが分かります。

霊の深い部分で知ることになります。神に愛され、神を愛しているので、自分が経験したことがなくとも、直感的に知っています。神を愛する人には、神が、すべてのことを相働かせて益としてくださることを知っている、とありますね(ローマ 8:28)。神に愛された子どもは、神のことをすべて知らなくとも、知っているということができます。それが、「すべてのことを判断する」という意味です。

そしてパウロは、「**その人自身はだれによっても判断されません(2:15)**」とも言いました。イエス・キリストによって知った神の愛があるので、困難な中にあっても喜びや平安があります。これを、生まれながらの人は判断できません。だれからも、このとてつもない喜びと平安が分かってもらえません。それは、神の下さった救いがあり、その恵みがあるからです。

### 3B キリストにある幼子

しかし、コリントの人たちを見ていると、御霊を受けた人のように見えないとパウロは言います。妬みや争いがあり、「**あなたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる**」と言いました(3:3)。信じて救われているならば、どうして、ただの人、つまり世の人と同じようなことをしているのか？ということでもあります。何から救われたのか？罪から救われています。だから、救われた人が、罪の生

活をしていることは矛盾しているのです。生まれながらの人であるならば、そうしたことは常であることは分かります。けれども、御霊を受けているはずの人々が、なぜ同じようなことをしているのか？ということですね。

つい最近、若いクリスチャンのブロガーが、クリスチャン同士の罵り合いにまいてしまっていることを漏らしているのを読みました。誹謗中傷のコメントも、ブログの中で届くそうです。しかし、それはキリスト教に敵対している不信者ではなく、キリスト者を名乗る者たちなのです。救われているはずなのに、罵り合いという、どうしてか救われる前と同じことをしているのです。

それをパウロは、「**肉に属する人**」と言ったのです。彼らは、では、救われていないのでは？と思うかもしれませんが、そうではないのです。すぐに「**キリストにある幼子**」と言い換えています。つまり、キリストの内にいる人なのです。けれども肉の姿が顕著なのは、それは、キリストの内にいるけれども、まだ幼いということを示しているということになります。

霊的な成長が鍵となります。教会のことを、パウロはキリストのからだであり、キリストの身文にまで成長する存在だと言っています(エペ 4:13)。私はイエスを信じて、地獄から救われた、というだけではないのです。キリストの身文にまで達するということが、救いの目的です。神のかたちから落ちてしまった人が、キリストにあって神のかたちに回復するのが、救いです。そして世界も、神の創造通りに元通りになることが救いです。宝くじのように救いを考えてはいけません。

### 1C 救いの恵み

パウロは、この手紙の挨拶で、すでに「1:4 私は、キリスト・イエスにあってあなたがたに与えられた恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも私の神に感謝しています。」と言っていました。ですから、コリントの教会の人々の多くは、すでに恵みによって、信仰によって救われていたのです。救いについて、ある方が次のように説明していましたが、全くその通りだと思います。泥沼にいた人を、イエス様が救い出して下さり、引き上げてくださいました。けれども、泥だらけです。その泥を洗淨することによって、元に戻ることができます。命拾いはしたけれども、泥だらけのからだで生活をしたら、社会で受け入れてもらえません。

それが霊的に起こります。永遠の救いを手に入れているのですが、その救いのすばらしさを自分の生活の中で体験していないのです。キリスト者として生きていくのは、あまりにも世の中が自分にありすぎて、惨めです。だからといって、世の中に戻るといっても、キリストが内におられるので、そこでも惨めな気分になります。生まれながらの人か、御霊を受けた人か、どちらかであるはずのところ、どちらも自分の内にあるので、最も惨めな位置に自ら立ってしまっています。

### 2C 実を結ばせていない状態

つまり、救われるための信仰はあっても、その救いの恵みに留まっていないという問題がありま

す。あたかもそれは、恋愛して結婚した夫婦が、次の日から独身の時と同じように別居のままで、結婚の実質的な営みがないままで暮らすようなものです。共に住む、留まることによって、初めてその関係が育まれます。

恵みの中に留まれば、その実を結ばせることになります。「テトス 2:11-12 実に、すべての人に救いをもたらす神の恵みが現れたのです。12 その恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て、今の世にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し…」恵みが現れたら、不敬虔と世の欲を捨てます。恵みが現れたら、今の世にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活します。

神の恵みを受けて、その恵みに留まる努力が必要です。ペテロは第二の手紙で、熱心に徳を身に着けることを勧めている箇所があります。「1:5-9 だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、6 知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、7 敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。8 これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、私たちの主イエス・キリストを知る点で、あなたがたが役に立たない者とか実を結ばない者になることはありません。9 これらを備えていない人は盲目です。自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまって、近視眼的になっているのです。」一日、一日、主の前に向かい、主にこれらの徳を身に付けさせていただけのように祈ります。そうすると、自分ではなく、神ご自身が実を結ばせるようにさせていただきます。

けれども、そこで思い切って立ち上がり、霊的フィットネスをする必要があります。行っていないので、信じて罪が清められたのに、いつまで経っても、罪を繰り返してしまいます。ヘブル人への手紙 12 章で、著者は、このことをまさに、怪我をした後のリハビリに喩えてこう言っています。「ヘブル 12:11-13 すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。12 ですから、弱った手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。13 また、あなたがたは自分の足のために、まっすぐな道を作りなさい。足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろ癒やされるためです。」痛くとも、動かすことで初めて癒しがはじまります。自分が救われる前に行っていた罪によって、いろいろな損傷が霊にも魂にもあることでしょう。けれども、痛みはありますがしっかりとリハビリ、霊的鍛錬を施すのです。今までのやり方とは違うので、初めはぎこちないでしょう。けれども、新しい習慣を行っているうちに、それが身に付きます。既に新しくされているので、実はこちらのほうが自分に合っているのです。救われているのに、罪の生活を送ることほど、本人を苦しめることはありません。

### 3C 十字架を背負っていない人

そして肉に属する人は、イエス・キリストを自分の主として、その中で生きていないという問題があります。自分自身を明け渡していないのです。この方に支配していただいていないのです。イエス様は、弟子たちに、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい、と言われましたね。その捨てるということ、十字架を負うということをやっていません。

イエス様が、エルサレムに向かっておられた時に、大勢の群衆が一緒についてきたのと同じなのです。何かをしてもらえると来て来ているのですが、ついていくために自分を退けるということをしていないので、イエス様は言われました。「ルカ 14:26 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」自分のいのち、というのは自分の深い部分で大事にしている生活と言ってもいいでしょう。それさえも、イエス様に従うために退けるということをしないと、結局、表面的なところで、イエス様について言っているように見えるだけになってしまいます。本質は従っていないので、絶えず、どこかでつまずいたり、堂々巡りしたり、同じ問題をいつも引き起こしてしまうのです。

## **2A 乳を飲む状態**

続けてパウロは、キリストにある幼子について、2 節でこのように語っています。「私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」パウロが、神のことば、またその教えを食べ物に喩えています。そして、信じたばかりの人たちに食べさせるものは乳で、成長すれば固い食物を与えるのですが、成長していなければいけない年数が経っているのに、それでも乳を飲んでいてと言っています。

### **1B 固い食物が無理な人**

赤ん坊の時に乳を飲むことは、とてもほほえましいことです。お母さんのおっぱいからお乳をもらうことも、いつも泣いていることも、おしめをしていることも、すべて赤ちゃんの特権です。同じように、イエスを自分の救い主として信じて受け入れ、間もない人たちが、その喜びにあふれる姿を見ることは、私たちにとって恵みですね。けれども、まだ知識が少ないですから、今までやってきたことが主の目には間違っていたと気づかないうちは、それを行ってしまうこともあるでしょう。信仰の経験が少ないので、知恵が働かずに、極端に走ってしまうこともあるでしょう。けれども、それらは信じて間もないからこそ行ってしまう過ちで、想定範囲、許容範囲です。

けれども、おしめを中学生になっても、高校生になってもやっていたらどうでしょうか？また、おねだりを大学生になってもしていたらどうですか？赤ん坊の時にはとっても愛らしいこと、喜ばしいことが、悲しいこと、嘆かわしいことになってしまいます。同じように、霊的にいつまでも赤ん坊のままであることは、とても嘆かわしいことなのです。

先ほど、訓練が必要であるというヘブル書 12 章にある言葉を引用しましたが、彼らには、このような問題、つまり年数からすれば成熟していなければいけないのに、まだそうなっていないという問題があったようです。5 章 12 節から 14 節を読みます。「12 あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならぬにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。あなたがたは固い食物ではなく、乳が必要になっています。13 乳を飲んでいる者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。14 固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」

## 2B 荒野の放浪

ちょうどこれは、荒野の旅をしているイスラエル人に似ているでしょう。エジプトから脱出していません。そして、その救いの先には約束の地、カナンがあります。そこに、神の祝福の約束があります。そこに至るのは、シナイ山からたった 11 日です。ところが、カデシュ・バルネアまで来た時に、彼らは、約束の地には巨人がいるから私たちは勝てない、エジプトに戻ろうと言ったのです。それで、神は 40 年間の荒野での放浪を定められました。11 日で到着できるところが、古い世代が死に絶えるまでの 40 年間をかけないと、入れなかったのです。

こうやって、救われているけれども、その救われたことの醍醐味、というか、御霊による祝福を受けられていないという、中途半端な状況にいるのです。そして、一度、そこには行けない、エジプトに戻ると決めてしまったので、その生き方に対して死なないといけないと分かるまで、延々と、約束を受けられないまま、荒野の旅をしなければならないのです。荒野は、信仰が養われる絶好の場です。信仰の土台が補強される場です。食べ物が無い時に、神を信じる。飲み物が無い時に神を信じる。敵が襲ってきた時にも神を信じます。そうすることによって、御霊に頼ることも知るようになります、自分ではなく、神が共におられて大いなることをして下さるようになるのです。

ですから、自分の中で、一度決めてしまっていることがあるものがあれば、注意しないとイケません。キリスト者として生きていくべき道、その召しは分かっているのに、これだけはやっていきまじからと決めてしまっているものがあるかもしれません。それに対して死ぬことがなければ、自分が何をしても空回りになってしまいます。同じところを巡り歩くことになってしまいます。神の言われていることはその通りになるのだと信仰によって一歩踏み出す必要があります。

## 3B 士師時代の民

そして、肉的なクリスチャンは依存傾向が強いのです。私はアポロにつく、私はパウロにつくとか言っているのは、自分がキリストにある者という信仰が弱いので、人に頼っているのです。その松葉杖は、初めは必要です。生まれてきた赤ん坊はいろいろな助けが必要ですから。けれども、いつまでもそれを続けると悲惨です。

士師の時代がそうでした。民は、バアルやアシェルを拝みました。それで神が、敵によって攻められて、支配されることを許されました。その時に彼らは主に叫び求めます。その苦しみから助けをくださいと。主は、士師を送って下さり、敵と戦い、解放して下さいます。そして平安が訪れるのです。しかし、士師が活着している間は、イスラエルは主に仕えるのですが、死ぬと、また偶像礼拝を始めるのです。そして苦しみの中で叫びます。そして主は、士師を送られます。そして敵を追いはらって下さり、平和が戻ります。その士師が死ねば、また偶像礼拝に戻るのです。

その根っこにある問題は、主を主としていないのです。そして、人に頼るといふ、心の中にある偶像があるからです。成長するとは、互いに必要としながらも、その助けは主から来るといふ、主との

交わりが深められていることです。

### 3A 妬みと争い

そして本文では、肉的なクリスチャンの特徴は、「妬みと争い」であります。

3:3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

興味深い調査があります。ニューギニアにある未開の部族についての研究です。毎朝、大げんかをしてから一日を始めるそうです。なぜ、喧嘩をし、争っているのか調べてみると、食べ物に事欠いていて、恒常的な栄養不足になっていたそうです。そのために、働くためのエネルギーが出て来ず、喧嘩をすることでアドレナリンが出て来て、それでようやく体を動かせるようになるのだということです。

これは霊的にも同じことが言えます。つまり、固い食物を取っていないので、つまり神の真理のことばをきちんと食べていないので、妬みや争いに訴えてしまうのです。

### 1B 平和なところの争い

箴言には、争いに対する戒めが多くありますが、いくつかを読みます。

「26:17 自分に関係のない争いにいきり立つ者は、通りすがりの犬の耳をつかむ者のようだ。」平和であるのに、問題がないのに、何か自分のほうで争いを探すぐらいのことをしてしまいます。それは、自分中心になっているからです。自分自身がどうなのか？という疑問は抱かずに、身近な人に問題だといって、自分の問題をその人の問題だと転嫁して、不満をぶつけます。それだけに収まらず、「なぜ、私のことに他の人たちは慰めてくれないの？これはおかしいでしょ？みんなも、この考えについて来るべき。」として、他の人々も巻き込みます。

「26:20 薪がなければ火が消えるように、陰口をたたく者がいなければ争いはやむ。」争う理由が特になく、ある時に不満が一気に爆発します。それには火の元があって、陰口を言っている人がいるからです。これも列記とした妬みと争いです。

「26:21 炭火に炭を、火に薪をくべるように、口論好きな人は争いをかき立てる。」口論好きな人は争いを引き起こします。人々がとくに問題に感じていないところを、ことさらに掘り起こして問題化させます。そして、あなたはどちらに付くのですか？として、仲間の間に敵味方を造る構図を作り出します。

「29:22 怒る者は争いを引き起こす。憤る者には多くの背きがある。」怒りを制御できないと、憤りをまき散らすと、どれほど人々に損傷を与えるか、本人は分かっています。

## 2B 分裂

そして、「分裂」を引き起こします。パウロについている、アポロについている、ケファについている、など、キリストにある一致ではなく、党派による結束を固めていくのです。残念ながら、それが教会史の中で起こります。分裂について表に出てくるのは、「どうしても、これこれの教義、神学には同意できない」というものがあり、実際に、そのようなことはあります。けれども、実際には個性のぶつかり合い、争いみたいな不純な動機がかなりあります。それを、まことしやかに、「信条が違ふ」と言ってしまうのです。

そもそも、私たちが信じているのはイエス・キリストご自身です。パウロが言っているように、十字架につけられたキリストです。この方にあつて、私たちは自分の罪が示され、人を指さす前にまず自分自身がどうなのか？が問われます。そして信条や信念が、どれほど大事なのでしょう？イエス・キリストが信じる方であり、信念に基づくのではないのです。信念が異なるからあなたは別、として交わりを断ち切るこそが、主ご自身の命令に背くことです。

## 3B 党派心

組織的に一つになる必要は全くありませんが、私たちは神を畏れ、キリストに従い、キリストにあつて一つであることをしっかり保って行かないといけません。他の教会の仲間、教団や教派があつても、それでもキリストにあつて兄弟姉妹なのです。そういうと、「あなたは間違っている。そうやって妥協しているから、教会が背教していくのだ。」と。ちょっと待ってください、それが、パウロが手紙の冒頭で語ったことです。「1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあつて聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。」

## 4A 恵みによる成長

私たちは恵みによって成長しましょう。ペテロが、第二の手紙の最後でこう言いました。「3:18 私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」

## 1B 愛にある歩み

どうやって成長すればよいでしょうか？パウロがエペソ人への手紙でこう言いました、「5:2 愛のうちに歩みなさい。」愛のうちに歩めば、妬みや争いから守られます。分裂を引き起こしません。「でもね、あの人がこんなに私の事、傷つけたんですよ！」「私に誰も話しかけてくれなかった。」とか、そこで「私」が主語になっている、主体になっていることに気づいてください。私がこうされたと、私が中心になっているのです。けれども、「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。」と命じられています(エペソ 4:32)。愛は、自分の利益を求めません。自分ではなく、相手を敬います。

## 2B みことばの内での生活

そして、御言葉に生きることが成長の二番目の鍵です。「ヤコ 1:22 みことばを行う人になりなさい



い。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。」みことばを自分のものにすべく、熱心に学ぶ人たちは多いです。けれども、それだけでは足りません。みことばが自分の内にあるのかどうか以上に、自分がみことばの内にいるのかどうか？が試されます。つまり、みことばに支配された生活になっているのかどうか？であります。

ですから、みことばを知るためだけでなく、一步踏み出してみましよう。みことばに生きるために、自分自身を主にお献げするのです。神に人に仕える務めに従事することです。神を愛し、隣人を愛するという現場に自分もいることです。聖書の紙面やネットの画面の前の学びだけでなく、人の前にキリスト者にあって行くことです。そうすれば、キリストが私たちを愛されたように、隣人を、兄弟を愛する機会が与えられます。

### 3B 自己吟味

そして自己吟味してください。「11:31 もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」主が判断しておられるように、有体に自分を吟味します。そして、自分が神から見たら、喜ばれていない生き方をしているのではないかと発見します。そして、そこから主に立ち返り、義の道に従って生きていくのです。

自分が信仰を持ってから、成熟へと向かったでしょうか？それとも、同じようなことをいつまでも繰り返していませんか？そういったいつまでも繰り返しているような生活を打ち捨てて、立ち直ってキリストに従っていますか？

また、自分はいつもこうやって人から傷つけられた、とか、みんなが私のこと聞いてくれない、とか、「私が、私が」というところで留まっていますか？そうったことを吟味して、キリスト者として生きているからという自負を捨てて、また改めて基本、基礎を据えるところからやってみましよう。私が、と言っているということは、愛によって育っていなかった。キリストの愛に結ばれていなかったことの表れです。

イエス様は、復活された後に、「あなたはわたしを愛していますか？」と尋ねられました。三度、尋ねられました。ペテロはまだイエス様の、その愛の献身には到達しておらず、三度尋ねられたことを悲しみました。けれども、それでもイエス様について行きました。ペテロは成長しました。それで、彼は教会指導者となり、聖書にあるように二つの手紙を書いて、成長しなさいと勧めています。愛の内に生きているか、吟味しながらの生活を、主は豊かに祝福してくださいます。